

母親が子育てにおいて

「子どもの原始性」に出会う時

——子育てにまつわる「影」の気持ちと
つきあうこと——

岡田 尚子

I はじめに

一九九〇年に前年の合計特殊出生率が一・五七%であることが発表された。それまで「ひのえうま」という特殊要因により過去最低であった、一九六六年の一・五八%を下回ったことから、このことは「一・五七ショック」と呼ばれ、少子化が社会問題として強く意識されるきっかけとなった。以来、日本では様々な子育て支援施策⁽¹⁾がとられ、多くの関心が寄せられてきた。

甲南大学では、二〇〇〇年に「子育て環境と子どもに対する意識調査」が行われて以来、阪神間とその周辺に在住する乳幼児を子育て中の母親およびその家族に対し、質問紙による意識

調査が行われてきた。二〇〇六年には、「第二期子育て研究会」により、「[第二回] 子育て環境と子どもに対する意識調査」が実施された。

本研究は、「[第二回] 子育て環境と子供に対する意識調査」で得られたデータの一部を、改めて統計的に分析し、考察を加えたものである。

II 問題・目的

1、子育てにまつわる「光」・「影」の気持ちと日常的な子育て意識

「子どもの日々の成長は本当に楽しいです。自分の子どもではあるけど、一人の人間として見てあげたいと思っています」。「兄弟で同じように育てていても、考え方や行動が違うのでおもしろい」。

これは今回の調査（「[第二回] 子育て環境と子どもに対する意識調査」）で、最後に設けられた自由記述欄に書き込まれた、実際の母親の言葉である。子育てにまつわる楽しさ・興味深さ——子育ての「光」の側面について言及されている。

しかし、もちろん子育てはこうした「光」の部分ばかりではない。

再び自由記述欄に書き込まれた母親の言葉に目を向けてみる。

「子育てでは、やっぱり大変です。日々、疲れている感じがします。自分の時間をなかなかとれない時は、イライラとしてしまいます」。「毎日反省の連続です。同じ叱ることも自分の気持ちや余裕次第で叱り方が違う気がします」。母親の子育てにまつわる苦悩・辛さ・困難さ——いわば「影」についての言及が並ぶ。従来子育て支援はこのような「影」の部分に焦点を当て、それを軽減することにより「光」の部分が増すようにと行われてきた。

今回の意識調査において、子育ての状況と子育てをする自分への意識に関する質問項目では、日常の子育て意識を問うているが、それでも子育てにまつわる母親の気持ちの「光」の側面と、「影」の側面が両方表現されている。しかしながら、ここで特徴的なのは、拮抗するかのような相入れない、子育てにまつわる「光」と「影」の気持ちと同時に両面的に保持している様相が明らかになっていることである⁽²⁾。

高石ら⁽³⁾はこの様相を「多相性」と捉え、その後の一対一のインタビュー調査から、こういった「多相性」を持つ日常の子育て意識は、「日々の子どもの生活の中で経験される個々の感情」（例えば、「つらい」「自由がない」等）と「時間的展望（過去と未来）を持つ中で経験される感情」（例えば、「振り返ると全体として楽しい」「今は楽しもう」「今だからこそ得るものがある」等）との複合的な構造を持つていることを見出し

ている。また、それには、一面を提示されると、語りにおいて、もう一面も意識的に立ち現われてくるという、有機性も見出されている。

2、「子どもの原始性」に出会う時

このように、繊細に複合的な多相構造をなす日常の子育て意識を持ちながら親は子育てをしているが、それが大きく脅かされる機会が子育てにはある。その一つが「子どもの原始性」に出会う時である。例えば、親がいくらかあやしても、全く子どもが泣き止まない時、親が伝えることに子どもが中々納得できず、激しい癇癪をおこしてしまう時、親が子どもとのやりとりで、わだかまりを感じているのに、子どもは天真爛漫に甘えて来る時、等々。子どもの感情表現は、屈託や遠慮がなく、生々しくストレート、衝動的である。本論ではこういった子どもの感情表現の特徴を「子どもの原始性」と表現することとする。

「子どもの原始性」は親にとって、時に衝撃的で侵入的な体験となる。

Freiberg, S. は、母親が自身の乳児期に情緒的な困難を抱えている場合、乳児期の子どもの要求や泣き声といった子どもの原始的な刺激が、母親に得体の知れぬ苛立ちや不安を惹起させ、母子関係に悪循環を生み、結果的に虐待へとつながるメカニズムを論じている。そして、そういった、得体の知れぬ苛立ちや

不安の感情を「赤ちゃん部屋のおばけ」と名付けている。この時母親は、あたかも情緒的な困難を抱えていた自分自身の乳児期にタイムスリップしたかのような体験世界にいるという。ここでは日常の子育て意識の構造における時間的展望が崩壊し、多相性も解体し、その時感じた感情に自分自身が飲みこまれるかのようなぬきさしならない状況に追い込まれている。その状況の中で母親は、自分自身が日常担っている社会的な「親」としての役割・立場の根本にある、一人の人間としての生身の姿をあらわに引き出されている様子がイメージできる。

一般的な親の場合、必ずしも「赤ちゃん部屋のおばけ」と表現するに相当するほどの圧倒的な感情が掻き立てられる危機状況に陥るとは限らないことが想像される。とはいえ平常時の子育て意識が大きく揺らぎ、均衡を失い、子育てにまつわる「影」の気持ちが強くなり惹き立てられ、思わず日常の「親」としての顔にとどまらぬ生身の姿を引き出されてしまうことは珍しくないのではないだろうか。

本研究では、子どもの原始的な感情表出・主張のありように対し、一般的に母親はどのように反応し、関わりを持つのかを探索的に調査する。そこから、一般的な母親の子育てにおける実際の姿を見出したい。

また、子育てをするにあたり、圧倒的多数の母親が、保育所もしくは幼稚園を利用しているが、そういった育児スタイル

(母親のライフスタイル)により、母親のありように違いが出るのかも併せて比較検討を試みたい。

III 方法

1、調査者全体(第二回)子育て環境と子どもに対する意識調査の対象と方法

対象：二〇〇六年六月現在、K市H区の全公立保育所、幼稚園、並びに同区に位置するK大学カウンスelingセンター心理臨床カウンスelingルーム主催の子育て支援グループに在籍する〇〜六歳(就学前)の子ども

の保護者。

方法：各機関を通して直接配布、各家庭で行う自記式質問紙調査。回収は郵送による。

時期：二〇〇六年六〜七月

回収状況：二〇〇票配布、有効回収数六四八(有効回収率三二・四%)

調査項目：基礎情報、子育ての状況、子育てをする自分への意識、子育ての悩みとストレス、子育ての社会的資源、子育てをめぐる配偶者への意識、子育ての葛藤場面における解決様式の項目からなり、末尾に自由記述欄を設けた。

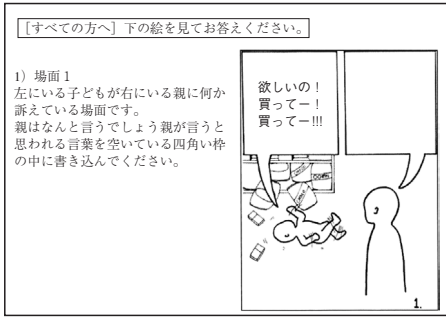
本研究では「子育ての葛藤場面における解決様式」にまつわるデータを分析対象とする。

2、本研究の方法

「P・Fスタディ (Picture-Frustration study)」を援用した、「投影法 (projective technique)」を利用し、場面を作成した。

投影法は質問紙法と比べて、①意識的な加工（虚偽の回答など）が起きにくい、②その人の持つ、より無意識的な生の傾向性が反映されやすい、という特徴が調査を行うにあたり有効と考えられたため採用した。

図1 質問場面



場面設定にあたって、子どもの自己主張が力強くなり、表現が多様化する一歳後半～二歳半児を想定し、日常性・一般性を考慮し作成を試みた。また、性別にとらわれず投影可能であるように、あえて服や髪形は記述しなかった。子どもが散らかしているものとしては、親が余り沢山は食べさせたがらないであろう、チ

IV 結果

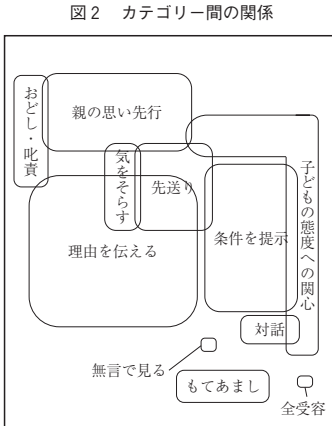
ヨコやポテトチップス等の菓子類を描いた(図1)。

1、「子どもの原始性」との関わりの様相

乳幼児臨床に経験のある臨床心理士三名により、個々の回答を文章全体の文意を尊重する形で、KJ法に準じて分類・分析を行った。複数パターンでの回答や、勝手な状況設定が附加された回答等は欠損値とした(↓欠損値二九、有効データ数六一九)。一一個のカテゴリーが見出された(図2・3)。

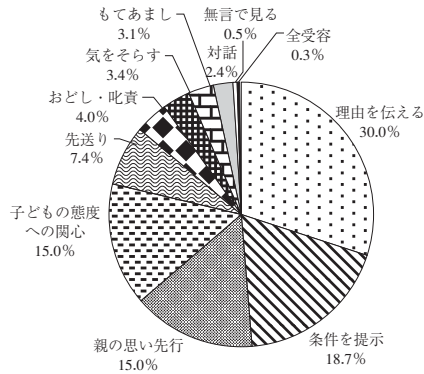
以下、回答者の多いカテゴリー順に記述する。

①【理由を伝える(一八六)】



子どもに、おやつを買わない理由を伝えるもの。「おうちにいっぱいおやつあるよ」「このあいだ買ったから今日は買わないよ」「今日は買わない約束でしょう」「お金がないからまた今度ね」等

図3 各カテゴリーの比率



(以下(一)内は各カテゴリー内のデータ数を、「一」内は代表的な実際の回答例を示す)。

②【条件を提示(一六)】

買うにあたって条件づけをするもの「「一つだけね」「お利口さんにしていたら、ひとつだけ買っ

てあげる」「お父さんがいる時に買おうね」「お誕生日に買ってあげる」等」。

③【親の思い先行(九三)】

買わないという親の思いを一方的に子どもに伝えるもの「「買いません」「知りません」「だめ」「ほかの場所に連れて行く」「等」。

④【子どもの態度への関心(九三)】

買う・買わないではなく、現在の子どもの言動に焦点化するもの「「そこで寝ころんだらだめでしょ」「みんな見てるよ。はずかしいから早く立ちなさい」「ちゃんときれいに直しなさい!!」

等」。

⑤【先送り(四六)】

単純に、今現在ではなく、未来に先延ばししようとするもの「「また今度にしようね」「ほかにもあるからいろいろ見てから考えようね」「お家に帰ってよく考えてみよう!」等」。

⑥【おどし・叱責(二五)】

子どもに権威的に接し、買わないことを一方的に伝え納得させようとするもの「「いい加減にしなさい!」「帰るよ」「何も言わず立ち去る」。

⑦【気をそらす(二二)】

目の前のお菓子から別の物事に意図的に子どもの意識をそらして解決を図ろうとするもの「「今日は買わないよ。早く帰って遊ぼうよ」「あっちにもっといいものがあるよ」「○○ちゃん、家にもっとおいしいものあったんじゃないかな? 帰ってさがそー!」。

⑧【もてあまし(一九)】

葛藤状況に対しての反応として脆性を感じさせるもの「(無回答(白紙)、「なんで? てかソレ何?」「どれが欲しいの? どうしてほしいの? (なぜ)」等」。

⑨【対話(一五)】

買う・買わないではなく、子どもの言語表現を引き出し、言葉でのやりとりを試みようとするもの「「泣かないで言ってご

図5 保育所を利用する母親群の各カテゴリーの比率

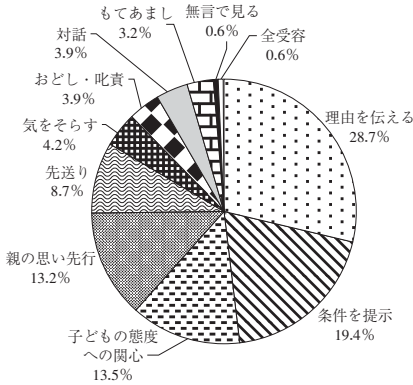


図4 幼稚園を利用する母親群の各カテゴリーの比率

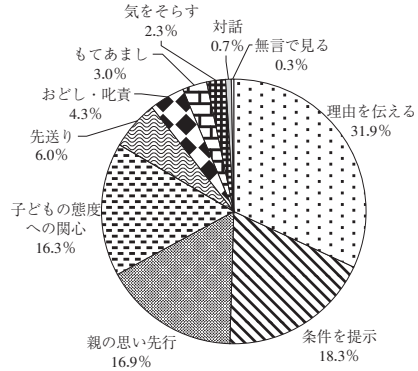


表1 「対話」カテゴリーの該当者 (人)

	該当しない	該当する
保育所を利用する母親群	298 (96.1)	12 (3.9)
幼稚園を利用する母親群	299 (99.3)	2 (0.7)

(註) カッコ内の数値は群内の%。

らん」「何がほしいの? 泣いたら買ってもらえる物かな? ちゃんとお話して」「どれもこれも買えないよ。ちゃんと話してみて」等)。

⑩【無言で見る (三)】

言動として積極的な表出を行わないもの (「何も言わない」「知らん顔して影から見とく」)。

⑪【全受容 (二)】

子どもの求めるがままに欲求を満たそうとするもの (「はいはい。持っておいで」「何をしているの!? はいはいこれが欲しいの?」)。

2、保育所を利用する母親群と幼稚園を利用する母親群の比較
保育所を利用する母親 (以下保育所母親群) (三二〇名) と幼稚園を利用する母親 (以下幼稚園母親群) (三三〇一名) 間で、前述の二つのカテゴリーごとに、 χ^2 検定を行った (それぞれの群での各カテゴリーの比率は図4・5に示す)。

「対話」カテゴリーのみ有意差が認められ ($\chi^2_{(7)} = 7.023$, $p = 0.001$)、他のカテゴリーには統計的に有意な差が認められなかった。表1によれば、保育所母親群の方が幼稚園母親群よりも、「対話」カテゴリーの回答をした人が多かった。

V 考察

1、「子どもの原始性」との関わりの様相

① カテゴリー全体を通じて

提示場面は、店で、子どもが床にひっくり返り、半分パニツクのような癩癪を伴い、商品を床にばら撒きながら、全身で親に対し強く自己主張を繰り返している場面である。他に、状況の緩和や改善のために介入してくれる人もなく、母と子が二者の関係の中で、否応なしに向きあわざるをえない。そして、親としては公共の場であることも動揺を誘う。

しかしながら、そのような状況においても子どもの強い欲求の主張（おかしを買って欲しい）に対し、引きずられるがままになっている反応（「全受容」）は、二名のみの最小カテゴリーにとどまった。

このことから、ほぼすべての母親は、子どもの主張が激しくとも、それをそのまま受け入れ叶えるとは別のかたちで、子どもの主張に関わっていることが見出された。

カテゴリーの規模が大きなものから目を向けてみる。

最も大きなカテゴリーを形成しているのは「理由を伝える」カテゴリーである。親として、子どもの欲求のおさめどころとなる枠組みである、買わない理由を伝え、やりとりを通して相

互的に関わろうとするものである。

次に大きなカテゴリーである「条件を提示」カテゴリーも同様、子どもの欲求のおさめどころとなる、買うにあたっての条件を伝え、やりとりを通して相互的に関わろうとするものである。

子どもの反応は激しく動物的である。場面を見て、回答しようとする身を寄せてゆくと、身体感覚が動的に活性化してゆくのを感じる。子どもの反応に呼応するように、親側も動物的な反応が多いのではと予想していたが、実際は上位の二カテゴリーは、いずれも子どもとの相互的な落ち着いた「やりとり」を志向したものであった。

さらに「やりとり」という要素に注目すると、九番目の「対話」カテゴリーも類似カテゴリーといえよう。これら「やりとり」にまつわる三つのカテゴリーを合わせると、すでに過半数の親の反応を網羅することになる。

次に多いのが「親の思い先行」カテゴリーである。前出の三つが、子どもとのコミュニケーションの相互性を感じさせる言葉かけであったのに対し、このカテゴリーは、「買わない」という思いの伝え方が一方的である。にべもなく宣告・通達することにより、子どもの要求の受容を断絶し、欲求を封印するべく「対決」している。

それ以外にも、「おどし・叱責」カテゴリーも「対決」の様

相を見せている。「親の思い先行」カテゴリーが、一方的な拒否・断絶の対決であるとすれば、こちらは圧倒的な上位性・権威性をベースにした親と子の非対称性・非対等性が強調される形のパワーにより、子どもの欲求を封印しようとする「対決」である。具体的な回答例からは、ぬきさしならないような緊迫感が感じられるものもある。これら「対決」にまつわる二つのカテゴリーを合わせると、反応の約二割弱を占める。

次に「子どもの態度への関心」カテゴリーに目を向ける。店内でのこういった子どもの態度は、子ども自体への関わりづらさに加え、他者の目も看過できず、大いに親を動揺させる。ここでは、他者の目という第三の要因が、親側も事態の主役に押し上げている。「しつけ」的な観点からの声かけもあるが、中には子どもと同じ舞台に立ったように、子どもの感情の発露と呼応するかのように親も感情をあらわにし、互いの感情をぶつけ合う「戦い」も繰り返されている印象である。これは全体の約一割半を占めている。

次に「先送り」カテゴリーと「気をそらす」カテゴリーに目を向ける。前者は子どもの、*「だった今」* 欲しいという欲求を、時間軸の先に振り換えることにより解消しようとするものである。後者は時間軸を振り換えるのではなく、欲しいと主張しているお菓子以外の物事に子どもの欲求を振り換えるものである。どちらも、ひょい意識転換をする、化かし合いのような「こ

まかし」や、ユーモラスな「遊び」の要素や、またそこにしっかりと「交渉」や「駆け引き」も組み込まれており、子どもと親の「知恵比べ」のような印象である。これらは合わせて全体の二割をしめている。

このように一般的には、九割以上の母親は、子どもとの「やりとり」「対決」「戦い」「知恵比べ」といった関わりで、「子どもの原始性」と向き合い、時に奮闘する実際の反応が浮かび上がった。

大日向⁽⁴⁾は、日本において、社会的に母性愛の崇高な面だけを賛美する風潮が存在することを指摘し、これを「母性愛神話」と名付け批判的に論じている。母性愛神話の中で語られる母親は、気高く、献身的で慈愛に満ち、聖母のようなイメージである。本研究で見いだされた実際の母親の回答には、子育てにまつわる「光」の気持ちにあふれた、聖母のイメージに通じるような隠やかで温かくスマートなものも多く見受けられる。しかしながら、そういった回答だけではなく、粘り強くやりとりしたり、子どもがヒリリと感じるような怒りを表現したり、時に苛立ち、時にひょうきんに……「光」だけではない気持ち——時に「影」の気持ちも伝わってくる、生身の汗や涙もイメージできる回答も同様に多く存在する。母性とは何かを言葉で語ることは難しい。しかしこれらの母親の姿は、「子どもの原始性」に出会い、日常の「親」としての顔にとどまらない、生身

の姿を思わず引き出されるような感情の揺らぎを体験しながらも、子どもに関わりとうとする中で表現された実際の姿であることに立ち戻り考えると、「聖母」と対照すれば様相は異なるが、母性は、「影」の気持ちを抱えながらも母親として関わりとうとする、こういった姿も包含して語られる必要性があるのではないだろうか。

残るカテゴリーは「無言でみる」カテゴリーと「もてあまし」カテゴリーである。前者は言語での表出はないものの、両者ともに親側の関心と、何らかの意図が潜んでいるように感じられるが、その内容の明確な特定は困難である。

特に気にかかるのは後者である。全体の三・一％と割合は低い。一見して、Feibelsが描いたような虐待につながるプロセスと断定される反応は見受けられなかったが、中には子どもの原始的な欲求表出の場面を目の前にして、感情的な何らかの困難をひきおこし、大きな、存在の揺らぎを体験しているものが含まれているのではないかと懸念される。

②「もてあまし」カテゴリーの回答から

「もてあまし」のカテゴリーの回答の一つに、「なんで？ てかソレ何？」というものがある。回答者は自由記述欄に、次のように子育てにまつわる思いを述べている。

まず、親（大人）の目線だと子どもの行動は理解しにくい。子どもの目線で考えると「楽しい」こと、子どもそれぞれに合

った子育てを心がけていることが述べられている。そして、「楽しくて過ぎず」の一番。イライラとしても深呼吸。イライラも消えていきます。頑張りすぎず楽な気持ちで、一日一生！〇〇六才までなんてカワイイもんよ！ ぐらいに思ってる。これでイイのかなあ！？ すごく頭の固い親にはなりたくないです！」とある。

まず一番に伝わるのは、子育てに対する一所懸命な強い思いである。

そして、文中に「楽」の文字が三回も登場し、子育てを「楽」な気持ちで「楽し」んでいるとの言葉が並んでいることに目が止まる。

しかしそういった文面とはうらはらに、「楽しくあらねばならない」とばかりに自分を鼓舞するかのような、痛々しいまでの努力や、ほっと力が抜けない緊張感が伝わってくるように感じるのは、筆者のみの主観であろうか。

高石^⑤は今日の都市部で乳幼児を子育てする母親のほとんどは「子育ては楽しい」と答える意識的構えをもっていることを指摘している。そして、「母親になった女性」「子育ては楽しい」と感じ、そう答えるべき」とする社会的圧力があること、さらには、「母親になった女性はみな子育てを好きでなければならぬ」という価値観があるとしている。大日向は母性愛神話^④を指摘してきたが、これもまた、新たな母性愛神話とい

えるのかもしれない。

母親の子育てにまつわる思いは「多相性」をなしている。そして、一面が提示されると、もう一面も意識的にたち現れてくる有機性も見出されている。意識の中で「楽しさ」という「光」の一面が強調される時は、もう一方の「影」の気持ちも同時にどこかで同じくらい強く活性化されるのではなからうか。

光が強くなればなるほど影は濃くなるという。活性化された「影」の気持ちを無視し続けるとすれば、それが残された宿題のように重なり、増えていくことにはならないだろうか。そしていつか、抑うつ的な気持ちに見舞われるリスクを高めていることにはならないだろうか。また、「親」としての顔にとどまらぬ、生身の姿を引き出されるような揺らぎを感じながらも、「楽しさ」の意識で乖離し続けているのであれば、大変難しい場合もあるが、それは子どもと生身で向きあっている関わる貴重な機会を自ら手離していることにはならないだろうか。

このように考えてみると、子育てにまつわる「影」の気持ちは、単純にネガティブなものとして軽減・排除しようとのみ志向すべき対象ではなく、時に、何らかの形で一面的になったり、かたよりの持たざるをえなかった親の生身に対する、重要な呼びかけとなっている場合もあると捉えることはできないだろうか。

回答者は終盤、「これでイイのかなあ!」と、「光」の気持ち

と異なるためらいの気持ちを始めて表現し、立ち止まっている。

調査全体を通して見ても、「影」の気持ちを感じつつ「影」の気持ちに呼びかけられつつ、母親としての関わりに奮闘している回答が多く存在している。

もちろん、従来の子育て支援における、「影」の気持ちを軽減することにより、「光」の気持ちを増やそうとするアプローチに意義がないわけではない。しかしながら、今回の調査の結果から考察するとすれば、「影」の気持ちへの、そういった直線的なアプローチの観点だけでなく、「光」と「影」両方の気持ちを、柔軟に両面的に行き来しながら、自身のそれらの気持ちの中で作ってゆくという観点の重要性も高いのではないかと考えられる。

2、保育所を利用する母親群と幼稚園を利用する母親群の比較
「対話」 カテゴリーにおいて、保育所母群と幼稚園母群の間で有意な差が見受けられた。

「対話」 カテゴリーは、文字通り、子どもとの言葉でのやり取りを引き出すものとするものである。

言葉でのやり取りを積極的に促すことは、子どもに自分の思いを自身で表現させ、相手に伝えさせるという点で、以心伝心

とは異なり母親と子どもの他者性を前提としている。保育所母群は、この他者性に対し、より開かれていようである。

保育所を利用する母親は仕事を持っている。職場での大人のコミュニケーションは思いをきちんと言葉にすることが前提である。もしかするとそういった母親自身の職業経験に裏付けられた関わりの傾向性が反映されているのかもしれない。そういう意味では、育児スタイル（母親のライフスタイル）の違いは「子どもの原始性」への関わり方の違いにつながっているといえる。

とはいえ、一一あるカテゴリーのうち、有意差が見られたのは規模の小さい「対話」カテゴリーただ一つであったことを考えると、保育所母群も幼稚園母群も、子どもの原始性に対してはほとんど同様であり、育児スタイル（母親のライフスタイル）の違いは、大局的にみると、それほど決定的な違いにつながらないとも言える。

このことから、子育てにまつわる「影」の気持ちを惹起させられる契機ともなる、「子どもの原始性」への関わりの困難さは、育児スタイル（母親のライフスタイル）の違いなどで容易に変化・軽減しない、もっと本質的な子育てのテーマであると言えるのかもしれない。

VI おわりに

子育ては楽しい「光」の側面だけでなく、「影」の側面も包含している。本研究では「子どもの原始性」に出会ったときの、母親の実際の姿を見出すことを試みた。

冷静に考えれば、母性愛神話で描かれるような母親は、観念的であり、実態と異なることが想像できるはずである。しかし、虐待や事件など、子育てにまつわる「影」の気持ちに関する出来事が起こると、ともすると、「母性の喪失」などと、母親のみに原因の全てを求める論調が出てくるのはなぜだろうか。

ユングは、個人の人生、経験に由来する部分を個人的無意識と呼び、個人を超えたものを普遍的無意識と呼んだ。普遍的無意識は、現在生きている人間の無意識の深部に共通した基盤となっているだけではなく、時間と空間を超えた全人類の経験や知恵が様々な形で蓄積されているという。神話は後者に属している。ゆえに個人の意識では自覚が難しい。

母性愛神話は普遍的無意識のどれほどの深部に根ざしているのかはわからないが、知らず知らずに物事の原因を優先的に母親に起因させているうちは、われわれはまだ母性愛神話の世界に住んでいるのであろう。

最近では諸外国の子育て支援についても関心が高まり、紹介

される機会が増えている。また、近年、父親の育児参加が盛んに述べられるようになり、日本の子育ての現場は大きな変化の途上にある。われわれ自身が、日本の子育てを相対的にとらえることができるような文化的基盤ができたとき、従来の様々な母性愛神話から解放され、新しい子育ての局面に開かれ「子どもの原始性」に対してする関わり方や、子育てにまつわる「影」の気持ちとのつきあい方に關し、また新たなものを見出してゆくことができるのかもしれない。

註

- (1) エンゼルプラン（一九九四年）、新エンゼルプラン（一九九九年）、次世代育成支援対策推進法（二〇〇三年）少子化社会対策基本法（二〇〇三年）などがあげられる。
- (2) 甲南大学人間科学研究所第二期子育て研究会『（第二回）子育て環境と子どもに対する意識調査』報告書』甲南大学人間科学研究所、二〇〇七年。

例えば「子育てに向いていない」・「良い親であろうと無理をしている」の質問項目において、「非常に当てはまる」「まあまあ当てはまる」と回答した母親がそれぞれ三四・一%、二一・〇%存在するのに対し、「子育ては楽しい」「子どもの成長を見るのがうれしい」「子どもに愛情を感じている」の質問項目において同様に回答した母親は八九・七%、九九・二%、九九・一%存在して

いる。

- (3) 高石恭子・穂苅千恵・甲斐暁子「母親の子育て意識の構造——幼稚園児を持つ母親インタビューの質的分析を通して——」日本心理臨床学会第二七回大会学会発表、二〇〇八年。
- (4) 大日向雅美『母性愛神話の罫』日本評論社、二〇〇〇年。
母性愛神話として「産むイコール育てる能力説」（おなかを痛めた我が子がかわいくないはずはない」と表現されるように、子を産む女性の生殖能力は、そのまま育児能力につながるとみなす説）、「三歳児神話」（子供が小さいうち、特に三歳までは母親が子供のそばにいて、育児に専念すべきだとする説）・「聖母説」（母親とは聖母のようにいつでも優しさで慈愛に満ち、無償の愛を与え、献身的なものであるとする説）・「母親イコール人間的成長説」（子育てが母親を人間的に成長させる面ばかりを強調する母性観）、を見出している。
- (5) 高石恭子「現代女性の母性観と子育て意識の二重性」高石恭子編『育てることの困難』二〇〇七、一六九—一九二頁。

（おかだ・なおこ／臨床心理学）